

武庫川市民学会誌 Vol.3, No.2, pp.48-55 (2015)

〔村岡会長追悼文〕



### 村岡浩爾会長 略歴

(1936年4月生まれ)

工学博士(大阪大学), 大阪大学名誉教授

- 1959年 大阪大学工学部構築工学科卒業
- 1961年 同大学院工学研究科修士課程修了  
同工学部助手, 講師を経て
- 1969年 同工学部土木工学科助教授
- 1977年 国立公害研究所水質土壌環境部水質  
環境計画研究室長
- 1986年 同水質土壌環境部長
- 1988年 大阪大学工学部土木工学科教授
- 1998年 同大学院工学研究科土木工学専攻教授
- 2000年 大阪産業大学人間環境学部都市環境  
学科教授
- 2004年 (財)日本地下水理化学研究所理事長
- 2007年 大阪産業大学退職
- 2012年 武庫川市民学会会長
- 2015年 永眠(10月13日)

## 村岡浩爾先生ありがとうございました

### 伊藤益義

村岡先生とお会いしたのは2003年武庫川流域委員会が発足したときです。

兵庫県で武庫川の治水を検討する委員会ができると聞き、武庫川を知る人間として参加を希望し、幸い公募委員として参加が叶いました。

1999年に櫻守の会を立ち上げ武庫川溪谷沿いの桜の園の里山整備活動を、2000年にエコグループ・武庫川を立ち上げて武庫川を流域市民に知ってもらおうと活動していましたので、武庫川のことは誰よりも知っているという自負をもっていました。

しかしこういう委員会は初めての経験でした。偉い先生方の中で発言できるかどうか心配でしたが武庫川のこととなると発言して響きを買ったものと思います。武庫川ダム反対の人たちから見ると生ぬるい発言、学者先生方からみるととんでもない発言だったと思います。

そんな中で村岡先生は流域委員会が終わった後、あの優しい目でお声をかけてくださり私を元気付けてくださいました。

おかげで多くの提案が採用されダム計画は凍結されました。また先生から有馬川についていろいろ御教示をいただきました。エコグループの財産のひとつです。

それにしても村岡先生の昇天はあまりにも早すぎました。これからは天国からお導きください。

(エコグループ・武庫川代表 Masuyoshi ITO)

## 村岡会長の思い出

岡田 隆

村岡会長が亡くなられてから月日も余り経たず、まだ「過去の人」として心の中で整理がつかない状態ですが、武庫川流域委員会時代からお付き合いを頂いてきた一人として色々な思い出があります。

流域委員会は平成 16 年（2004）3 月 21 日の第 1 回会議以来本会議以外にも多くの会議が行われ、合計 229 回の会議が約 3 年半の間に行われ、月平均 5 回以上即ち 1 週間に一回ぐらい行われていたこととなります。終わった時にはほっとしたのが正直な感想でした。会議中は、私と先生の席とは遠く離れて休憩時間でも余り話をする機会はありませんでした。それよりも会議終了後に「反省会」と称して息抜きに一杯飲みに行ったり、ざくばらんに話をして、次第に親しみを覚えるようになりました。

委員会開催中に生瀬上流のリバーサイド住宅が洪水で壊滅的な被害を受け、約 80 世帯全戸の立ち退きという大災害があり、この事故からダム問題が更に大きく議論されるようになりました。村岡先生もこれに絡んで基本高水や地下水の問題等については積極的に意見を述べておられました。特に平成 18（2006）年 5 月 28 日に開催された基本高水選択専門部会は議論が延々と 10 時間以上に及びましたが、この時も先生は先ず豊かな自然環境を残す（つまり新規ダムは造らない）ことの他に新しいアイデアも積極的に出されました。その発言は環境を重視した先生の考えがよく理解できる意見でした。

村岡先生は流域委員会の終了後、「自分は今後は武庫川のことだけをやっていきたい」と言われて、武庫川市民学会創設の中心となって働いてこられました。その矢先に病魔に冒されて、活動も思うに任せぬ状態が暫く続きました。それでも各グループの集会にはよく参加され、発言も積極的にされていました。市民学会については、最期までかなり気にかけておられました。

武庫川流域委員会は私にとってかなりハードな経験であり、数々の体験をした場だったと思いますが、その間に村岡先生を始め多くの方々から色々なことを学んだ場所でした。今、改めて先生のご冥福を祈りながら、武庫川流域の一市民として先生のご遺志を受け継いで努力を重ねていきたいと思っています。

（武庫川の治水を考える連絡協議会代表 Takashi OKADA）

## 碩学の村岡浩爾先生を悼む

奥野年秀

本年 10 月 13 日早晩、公私共に長年にわたり親しく交流させて戴いた碩学の村岡浩爾先生が逝かれました。関西在住の環境科学を志す者にとって、同世代の志を共にする者にとって、極めて残念です。

先生は平成 16 年から 6 年間も兵庫県の諮問機関である武庫川流域委員会（松本誠委員長）において、環境工学や水環境学の視点から武庫川水系の環境保全に関する貴重な意見を述べられた。加えて、平成 24 年に、武庫川流域に居住する市民の意見を取り入れ学識経験者と共に考える武庫川市民学会を設立され、学会長として平成 25 年に当該学会の機関誌「武庫川の科学」第 1 号を発行され、平成 27 年 3 月の第 4 号の

巻頭言に、市民の眼で武庫川を科学する視点を、寺田寅彦（物理学者・随筆家）の言葉を引用して、“科学とは不思議を殺すのではなく不思議を生み出す”と説く。平成7年1月17日早朝に直下型地震が発生した阪神・淡路大震災では、神戸電鉄の有馬駅から神戸経由で環境庁環境委員会（東京）に出張する電車の中で経験したと語っていた。この時も寺田寅彦の言葉を引用して“天災は忘れた頃にやってくる”と言った。

当時、先生は、日本水環境学会関西支部の支部長をしていたが、次年秋季から筆者と共に震災被害で混沌とする神戸を後にして環境庁水管理課を訪れ、過去に赴任していた国立公害研究所水質部長の時代に培った人脈を活かして、震災による水環境への影響に関する調査研究とシンポジウムを開催する予算を要求するために努力され、関西支部に大学や公立研究機関の研究者で組織する特別研究委員会を設置して課題を実施した。

支部長を筆者に引き継いだ平成10年2月には、松方ホール（神戸新聞社）でシンポジウムを開催する基盤を作られた。当時、神戸新聞情報科学研究所の松本誠副所長（現、武庫川市民学会特別顧問）の配慮で松方ホールの講演と討論会を実施した。又、関西支部の幹事長であった古武家善成氏（現、武庫川市民学会事務局長）は、会場設定やシンポジウムの配布資料印刷等に尽力して戴いた。村岡先生の人柄を語る時、大阪大学名誉教授としての学識に裏打ちされた庶民性があり、常に、市民の目線の高さで語ることを心掛けていた稀有な学者であった。

5年前の忘れえぬひと時が仲間達の間で語り継がれている。日本水環境学会関西支部の川部会メンバーは2010年8月25日から3日間の沖縄旅行に向かった。目的は西表島の浦内川における亜熱帯雨林帯とマングローブの視察である。当時の村岡先生は極めて元気であり、星の砂海岸で仲間と泳ぐとか、浦内川の滝へのトレッキングなどに元気で参加されていた。筆者とK氏（滋賀県立大学名誉教授）はへたっぴで、途中の「あずまや」で仮眠してしまった。

さて、石垣島のホテルで一泊した夜、夕食後に部屋に戻り皆と沖縄県で最も長い浦内川（全長16km）の亜熱帯環境等の話題で賑わったのであるが、ダム建設における論戦では村岡先生の学者と庶民の目線の両面性が噴出した。論客であり野武士的なK氏とは良い意味で互いに好敵手であり、論戦に加わった仲間にとって“真夏の夜の夢”として語られている。土木工学の村岡先生に対して、農芸化学のK氏は全てのダム建設における環境破壊を展開した。村岡先生は日本の様な資源のない島国では国民への水力発電や灌漑用水の必要性を指摘した。K氏の論旨には一理もあるが、人類の知恵と自然への畏敬の念における大論争であった。次の朝、寝不足の顔を突き合わせたお二人と我々は昨夜の論戦を笑いながら朝食をとった。何と楽しい仲間なのだろう。この川部会を数年前に発足させたのも村岡先生であった。

ある年の夏に村岡邸（神戸市有馬町）で“すき焼きパーティー”をした。この時も村岡先生の神戸肉とK氏の近江肉との食べ比べと言う、唐突な発想によるお笑い会食会であった。熱烈な阪神タイガースのファンである村岡先生の逸話に、国立公害研究所での出来事があります。1985年秋の全国制覇では国旗掲揚台にタイガーの旗を揚げ、総務部から撤去を命じられたと言う。何と愉快な人柄であろう。

筆者の人生にとって忘れえぬ人柄でした。安らかに眠り下さい。ご冥福をお祈りします。

（元兵庫県立公害研究所参事 Toshihide OKUNO）



すき焼きの味見を集計する村岡先生



神戸肉と近江肉の味見を開始する村岡先生（右、筆者）

## 村岡浩爾先生の思い出

### 古武家善成

村岡先生と私の親しいおつき合いは20年前にさかのぼります。1995年当時、先生は日本水環境学会関西支部長をされており、その頃から私も関西支部の活動に本格的に関わるようになったからです。もちろん同じ関西支部の先輩としてそれまでから先生を存じ上げていましたが、先生は1977年から87年までつくば市の国立公害研究所（現国立環境研究所）に赴任されており、必ずしも近い存在ではありませんでした。

1995年は阪神・淡路大震災発生年です。支部長であった先生は、私も参加していた大震災の水環境への影響に関する水環境学会特別研究委員会の委員長として、4分科会の調査活動を巧みにまとめていかれました。この研究委員会の総括の泊まり込み会議がご自宅のある有馬で開催されました。夜の懇親会でワインを飲んでいると、このような場でワインを注文することが珍しかったのかワイン好きの先生とワイン談話になり、たちまち意気投合することになりました。

その後、私が関西支部の幹事長、支部長を務めた時には、大先輩として多くの助言をいただき、兵庫県立公害研究所で進めていた研究活動に関しても、ことある毎に叱咤激励を受けました。先生が立ち上げられた関西支部の川部会では、楽しくご一緒させていただきました。水質のみならず生物、歴史・文化など多面的に河川を再評価しようというこの部会では、川を自分の足で歩いて現場を知る「川歩き」が主要な活動となりました。国交省の多自然型川づくりのモデル河川である横浜市のいたち川を視察に行こうと、発議されたのは先生でした。2001年に実行されたこの視察は、先生を中心に少数のメンバーでの準備的な小旅行でしたが、初めての「川歩き」として忘れられません。現在まで関西地域を中心に70河川近くを踏破しましたが、先生は体調を崩されるまでその大半に参加されました。

先生とのこのようなお付き合いの中で、2009年に、水質調査を手伝ってほしいと誘われたのが武庫川の問題に関わるきっかけでした。それから武庫流会での活動を経て、2012年5月には武庫川市民学会が設立され、会長の先生を私が事務局長として支えることになりました。しかし、市民学会の3年半を振り返れば、先生を十分支えてきたかとの自責の念も湧きます。訃報に接した時には「ついに・・・」との想いで先生の死を受け入れましたが、時間が経つにつれ先生の存在の大きさを改めて感じ、悲しみがこみ上げてくるこの頃です。どうか安らかに眠りください。

（武庫川市民学会事務局長/神戸学院大学客員教授 Yoshinari KOBUKE）

## 村岡浩爾先生に寄せて

### 佐々木礼子

御霊(みたま)のご平安をお祈り申し上げます。

あまり聞き慣れないこの冒頭文は、神道となられ、一柱(ひとはしら)の神となって天に昇って行かれた故人への言の葉です。先生のご一族の宗派は仏教とのことでしたが、武庫川に携わったがゆえに、神道葬というご選択を生前考えられ、実現された、というのはさすが村岡先生だと思いました。

村岡先生と私は職業柄、近いフィールドに居りながら、本格的に出会い、活動を共にするようになったのは平成16年の武庫川流域委員会からです。出会ってから12年、これほどまでに考え方が共鳴できる師にめぐり合えたことは私にとって非常に幸運で大きなプラスとなり、また、私のような若輩者の意見に耳を傾け、導いてくださったことに深く感謝申し上げます。そして、ご逝去される間際まで武庫川づくりの一端を担う武庫川市民学会のことを考えられ、武庫川づくりの大きな礎を築かれたことに深く感謝

申し上げます。一般に神道では故人になると家の守護神になると言われていますが、先生は武庫川の守護神の一柱になられたのではないかと思っている次第です。

神道との出会いは、武庫川流域委員会で太古からの武庫川流域を語られる委員に出会い、村岡先生に問われて流域の神代(かみよ)を調べるうちに武庫川流域が伊勢神宮の鎮座する宮川流域と対等な関係にある西の宮であることを知ることに始まります。一分一秒の狂いもなく遙か彼方の東西南北に鎮座する神々に感動し、そのころから徐々に神道に惹かれ、「いつか同じ霊界に行くのなら地獄のない天津国(あまつくに)にいて一柱の神になれたらいい、願わくは一柱の神になってめでたく天に昇っていきたいね。神になれるなんて第一格好がいい。私は長男でもないから何のしがらみもないし、神道葬の実現も神になることも可能。もしも輪廻転生や神代の世界が本当にあるなら試しに行ってみて天からメッセージを送るから、佐々木さんも神道になってみたら？」などと冗談交じりに先生がおっしゃっていたことを思い出します。

ご病気になられてから、先生との会話をふと思い出し、手術の前に天照大神の荒魂のある廣田神社に病氣平癒の祈願に行きました。退院後、先生はきちんとお礼参りをされていました。この頃から神のお墨付きになられたのかもしれませんが。武庫川講座の講義では水循環の話の中に輪廻転生を循環のひとつの事例として盛り込まれていました。さらに、神道葬をすると家族に負担がかからないという話は本当か、と尋ねられたので調べてみたら仏教では初七日、三十五日、四十九日、一周忌、三回忌…五十回忌と五十年もの間、数え切れないほどの法事があるのに対して、神道では五十日で喪が明け、至ってシンプルなことがわかりました。残されたものへの負担も考えられ、ご家族へのご自愛に満ちておられたことも先生らしいと思いました。そして、神が居ないといわれる神無月にこっそり天に昇られ、天気予報とは裏腹に、葬儀の日から抜けるような雲一つない晴天がしばらく続いたのは、生前おっしゃっていた先生からのメッセージのように思えてなりません。

心から、村岡先生の御霊のご平安をお祈り申し上げます。

(武庫川づくりと流域連携を進める会理事長 Reiko SASAKI)

## 村岡浩爾先生を偲んで

法西 浩

2015年10月14日、古武家善成先生と吉田博昭様から、村岡浩爾先生の訃報を伝えられました。とても残念です。また、10月15、16日の通夜、告別式ともに出席できず、残念です。

私は、今「武庫川総合治水へむけて 提言書 武庫川流域委員会(平成18年8月30日)」を前にしてこの文章を綴っています。2004(H16)年に「武庫川流域委員会」が発足し、25人の学識経験者や住民で構成されていました。そのうちの学識経験者10人に先生と私が選出されていました。この提言書(2006)「総合治水へむけて」を発刊するにあたり、環境問題を考えるグループの学識経験者4人が、提言書の「V 流域環境からのアプローチ」(94~106頁)を担当しました。水環境の学者である村岡先生がリーダー(環境ワーキンググループ主査)で、私が生物の担当でした。

本会議とは別に、環境ワーキンググループで長い時間をかけて協議しました。この長い時間が、先生と私がおつき合いした大切な、楽しい時間でした。この会議の詳細についてははっきり覚えていませんが、ただひとつ鮮明に覚えていることがあります。先生の草稿と私の草稿を突き合わせ、読み合わせていました。私が、草稿の内容に、河川には湧水も地下水もあり、重要な役割を果たしている、と述べているのをご覧になり、「そのとおり、同感です。大賛成です」と大変褒められました。第一番目の思い出です。

その後2008(H19)年に、流域委員会と住民有志により、「武庫川づくりと流域連携を進める会」(以下、武庫流会)が発足しました。この会の重要な行事として、武庫川の水質調査が2008年6月に始まりました。村岡先生と古武家先生がリーダーとして活躍され、私たちを指導してくださいました。第1回目の調査

(2008・6) 後に、武庫流会の運営会議（仁川事務所にて）でこの成果の検討が行われました。このときの下流部武庫大橋のCODは3でしたが、下流部の他地点のCODは7～8が普通でした。この飛びぬけてよい結果に対して、私は、仁川の伏流水がこの大橋付近で湧出している、とコメントしました（1995年の震災以来、仁川は溪谷入口からずーと伏流し、本流合流点まで流れないことが多い）。武庫大橋付近は仁川の伏流水で浄化されたと、私は思っていました。しかし、村岡先生からは「それはないですよ」でした。これが第2番目のお言葉で、はっきり覚えています。これも思い出です。

武庫流会は、2011（H23）年に市民や市民環境団体を募って「武庫川流域圏ネットワーク」を結成しました。さらに翌2012（H24）年には、学者だけでなく市民が武庫川を科学する「武庫川市民学会」を立ち上げました。その会長に村岡先生がなられました。ご病気が進行する中、学会の発展に大変努力されました。私たちはとても感謝しております。2013年3月31日、学会誌「武庫川の科学」第1号が発行されました。現在は第4号（2015.3.31）まで発行されています。また、セミナーは2015年8月29日に第5回を終了しました。事務局長古武家善成先生は、村岡会長をよく補佐され、緻密に会を運営されていました。古武家先生に対しても、紙面をお借りして厚く感謝申し上げます。私にとっては、「武庫川市民学会」、「武庫川の科学」を十分活用していくことが、武庫川流域の文化発展、創生、地域おこしだと強く感じるようになりました。学会誌への寄稿が大きな目標です。

先生は、まだまだこれからだ、というところで、10月13日に他界され、神様になられました。私たちは先生の志をつぎ、学会、学会誌を支えることが使命だと思います。私自身は、まず「武庫川の科学」第5号、第6号に寄稿することだと思っています。

楽しい思い出をありがとうございました。先生、さようなら。

（医師/武庫川市民学会理事 Hiroshi HOUSAI）

## 市民的視点と行動を共にした村岡先生と武庫川

### 松本 誠

村岡浩爾先生とお会いしたのは、2004年3月23日尼崎商工会議所で開かれた武庫川流域委員会の初会合でした。その時は11名の学識者委員、10名の公募委員など25名の委員の中で目立つ存在ではなかったが、その後7年間ご一緒した流域委員会の数えきれない会合の中で、常に市民的立場を重視して発言、行動された学識者委員として、先生は尊敬すべき貴重な存在でした。

流域委員会の活動の中で、先生は環境ワーキンググループの主査として提言書の取りまとめに尽力いただき、運営委員会にも最大限出席されて、行動を共にされました。武庫川流域委員会の特徴の一つは、学識者委員が従来の審議会等での対応と異なり、忙しい日常の中で膨大な時間を費やして、委員会活動に主体的に、本気で取り組んでいただいた委員が少なからずあったことです。村岡先生はその筆頭格であり、委員会と並行して立ち上げた「武庫川づくりと流域連携を進める会」（武庫流会）にも当初から熱心に取り組んでいただき、水質調査等で指導的な役割をしていただきました。

こうした経緯もあって、2012年5月の武庫川市民学会の立ち上げにも衷心からご尽力いただきました。

会長として、市民学会を牽引し船出した矢先にがんを発病され、厳しい闘病生活の中でも会長職を全うしようと出かけられ、メンバーの議論に加わり、市民学会の将来を見据えた提言を重ねてこられました。学会も3年を経て、これからという時期に先生を失った痛手は、メンバーすべてが受けとめているところ です。

武庫川づくりがいよいよ本格的に始まるに際して、先生がいつも口にされていた「健全な水循環系の回復と創出」という言葉を重く受け止めています。流域委員会の提言書（2006年8月）に先生自らが執筆された章の題名です。

水循環基本法がやっと昨年施行されましたが、早くから健全な水環境の形成を主張されていた先生の思いが、盛り込まれた部分です。川づくりは、流域の土地利用、水利用、産業、暮らしのあり方を総合的に追求する、新しい時代への処方箋でもあることを明示され、「武庫川づくり」の指針にもなりました。

武庫川づくりの新しい歴史が始まってから15年。この歩みをきちんと踏襲していくことが、先生の遺志を継いでいくことになることを肝に銘じたいと思います。

(元・武庫川流域委員会委員長/市民まちづくり研究所所長 Makoto MATSUMOTO)

## 追 悼

### 山本義和

村岡浩爾先生のお名前は、水環境学会誌を通じて存じ上げていましたが、2003年に私が勤務していた神戸女学院大学で水環境学会が開催され、門戸厄神駅近くの中華料理店での懇親会で同席させて頂き、楽しく一杯飲んだことをよく覚えています。私が定年退職した頃に、村岡先生から、「武庫川づくりと流域連携をすすめる会の会合に参加しませんか」とお誘いいただいたことが、今日の私に繋がっている。村岡先生とお知り合いにならなければ、私が武庫川と係わることはなかったと思われる。

村岡先生をはじめ多くの方々のご尽力によって、2011年には「武庫川流域圏ネットワーク」、2012年には「武庫川市民学会」が結成された。村岡先生が、武庫川市民学会の初代会長として大きなご功績を残されたことは、関係者がよく存じ上げているところである。数年前に癌と診断されてからも、ご遠方から武庫川市民学会の会議に出席され、療養中もメールを通じて貴重なご意見を数多く頂戴しました。すごい精神力をお持ちの先生でした。最後にお目にかかったのは、武庫川市民学会事務局長の古武家善成氏と今年7月に有馬のご自宅にお見舞いに伺った時でした。その時は2時間余りお話をしましたが、その多くは武庫川市民学会の今後のことであつたように記憶している。そして、お別れする前に、「最後に私のピアノを聞いてくれ」と言われて、かなり長くて難しい曲を弾かれました。これは本当にすごいことで、言葉に表すことができません。

村岡先生が、「いつまでも私を頼らずに、自分達の足で歩みなさい」と天上から私達に声をかけ続けておられるような気がしてならない。

(武庫川流域圏ネットワーク代表 Yoshikazu YAMAMOTO)

## 川の師でもあり人生の師であつた村岡先生

### 吉田博昭

好奇心旺盛な新しもの好きで、会社努めの半分はリニューアルや工場建設など合理化・省力化プロジェクトリーダーを務め、再就職先でもISO 9001取得プロジェクトの一員として、品質管理という概念のない社員に無理難題を押しつけ、コンサルを騙し認証に漕ぎ着けるなど、阿漕で嫌われ者の役目を担ってきました。金になる事はもうやらない。人間関係も全て絶ち誰も気づかない孤独な路傍の石になろうと決めて退職しました。ふと気付いたら、地元の事も近所の方も全く分からない浦島太郎状態でした。そんなときに誘ってくれたのがワンダークラブで、何度か参加しているうち、リーダーから「武庫川流域委員会傍聴に行け」と言われたのが武庫川との関わりのきっかけでした。

傍聴を続けるうちに、現役時代の好奇心が蘇り川の面白さ奥深さが分かり、ドブプリ武庫川に嵌りこんでいまに至っています。

流域委員会は、流下能力を幾らにするか決めれば後は河川工学と土木技術者がいれば済むと思っていたが、検討しなければならない事の多さに驚かされました。河川工学と水文学の違いも分からなかった私に、「天文学・人文学・水文学」を三文学だと教えてくれたのが村岡先生でした。先生から戴いた教科書「水文大循環と地域水代謝」のページをめくる毎に先生の優しい笑顔が目に浮かんできます。古歌に「千早振る神よりいでし人の子の 罷るは神に帰るなりけり」とあり、神になられた先生が側近くで見守ってくれているようで、体温さえ感じられる気がします。

村岡先生は、これまで出会った数少ない人生の師でもあったと感謝しています。本当に有り難うございました。

(武庫川づくりと流域連携を進める会事務局長 Hiroaki YOSHIDA)

